

學
齋



虎の話

佐藤禮介

今年(ことし)は寅(とら)の歳(ととし)であるから、其(その)のトラといふ(いふ)に因(ちな)みて虎(とら)の話(はなし)を致(いた)さうと思(おも)ふ、虎(とら)は我(われ)が國(くに)には産(う)せぬけれど、之(これ)につきての傳(でん)説(せつ)は頗(すこ)多(おほ)い、巴(あ)提(てい)使(し)が虎(とら)を退(たい)治(じ)したとか、加(か)藤(とう)清(せい)正(せい)が十(じゅう)文(ぶん)字(じ)槍(やり)を嚙(か)み折(お)られたとか、地(じ)獄(ごく)の鬼(おに)は腰(こし)に虎(とら)の皮(かわ)を巻(ま)き付(つ)けて居(ゐ)るとか、兒(こ)供(ども)の時(とき)から随(ずい)分(ぶん)聞(き)いて居(ゐ)るが、果(はた)して「虎(とら)嘯(せう)げば風(かぜ)を生(な)ず」る程(ほど)、不(ふ)可(か)思(し)議(ぎ)の能(の)力(りき)を持(も)つて居(ゐ)るものてあるか、其(その)實(じつ)体(たい)につきて吟(ぎん)味(み)しやう、何(ど)處(どこ)に棲(す)むか、——虎(とら)は亞(あ)細(じ)亞(あ)にのみ産(う)するもので、他(や)の大(だい)洲(しゅう)には産(う)せぬ、しかし亞(あ)細(じ)亞(あ)の中(なか)でも中央(ちゅう)亞(あ)細(じ)亞(あ)には棲(す)みませぬ、最(も)多(おほ)のは東(とう)印(いん)度(ど)で之(これ)に次(つ)いで、馬(ば)來(らい)半(はん)島(とう)、支(し)那(な)、朝(あ)鮮(せん)等(とう)にも産(う)する、如何(いか)なる形(かたち)か——虎(とら)は其(その)概(がい)形(けい)甚(はな)だ猫(ねこ)に似(に)て大(おほ)き

くある、牝(め)虎(とら)の大(だい)なるものは鼻(び)端(たん)から尾(お)の末(まつ)端(たん)まで九(く)尺(しゃく)餘(よ)あつて、其(その)内(うち)尾(お)の長(なが)さは三(さん)尺(しゃく)許(ばかり)ある、虎(とら)の瞳(ひと)孔(くわ)は猫(ねこ)の瞳(ひと)孔(くわ)の樣(よう)に日(ひ)中(ちゅう)に細(こ)い線(せん)の形(かたち)をなさないで、圓(まる)き小(こ)孔(くわ)となる、虎(とら)は獅(し)子(し)の樣(よう)に鬃(げ)を有(あ)りませぬが、老(お)いたる牡(む)虎(とら)は頰(け)の毛(け)は大(だい)層(そう)長(なが)く延(の)びて鬃(げ)の樣(よう)になつて居(ゐ)ります、昔(むかし)の人(ひと)は之(これ)を見(み)て虎(とら)鬃(げ)といつたのかも知(し)れませぬ、毛(け)皮(かわ)は、赤(せき)黄(わう)色(しき)であつて黒(くろ)い横(よこ)筋(すぢ)がある。脚(あし)の内(うち)側(がは)と頰(け)の下(した)と腹(はら)と、眼(まなこ)の上(うへ)の斑(まだら)とは全(まった)く白(しろ)色(しき)である、尾(お)は淡(たん)黄(わう)色(しき)で黒(くろ)色(しき)の環(かん)紋(もん)がある、全(ぜん)身(しん)の赤(せき)黄(わう)色(しき)は濃(のう)淡(たん)種(しゅ)々(さ)である、時(とき)々(とき)甚(はな)だ淡(たん)色(しき)であつて殆(ほとん)ど白(しろ)色(しき)に似(に)たるものがある、斯(か)樣(よう)な虎(とら)を白(しろ)虎(とら)といふ、白(しろ)虎(とら)は黒(くろ)い横(よこ)筋(すぢ)も極(きま)めて淡(たん)色(しき)である、虎(とら)に白(しろ)虎(とら)あるは馬(うま)や象(ぞう)に比(ひ)べたものがあると、同(どう)じ譯(わけ)である、習(しゅう)性(せい)——虎(とら)の常(つね)に棲(す)む所(ところ)は高(かう)原(げん)の叢(そう)や、藪(やぶ)ある

沼地等である。虎の毛皮の色は枯草と其日蔭との色に能く似て居るから隠れて居るには甚都合良いのである即ち餌とすべき他の獸に見付けられず
に狙ふことが出来るのです、かく外界に似た色を保護色と云ひます、

虎は獅子などと同じく常に棲んで居る岩窟又は樹洞を有して、休むときは何時でも此所に退くのである昔の人が虎穴に入らざれば虎子を得ずなどいつたのも斯様な棲所を指したのでせう、

虎が食物を獲るには他の獸が水を飲みに出で来る所を付け狙ふのである、即ち他の獸の通るべき小道の傍に潜伏して獲物の来るのを待つこと丁度猫の鼠を付け狙ふ様である、他の獸が来れば益体を地面に平伏し適當の距離に近づけば電光の如く奮進一躍して之に咬み付くのです、若し其獸が

近いて來らぬ時は腹を地に付け匍匐しつゝ進むのです、其地を踏むのに音を立てずスラ／＼と匍匐行く有様は蛇の匍ふに似て其巧みなること驚くばかりである若し一度跳び懸りても他の獸を捕へ誤りたるときは決して之を追究することはない、而して更に第二の狙ひを致すのです 此時は甚激して居るゆゑ大に危険であつて往々人間をも害することがある、

虎の性質の猛烈なることは殆ど想像の外である其の餓えたるときは如何なる事があつても迫害を猶豫することがない、即ち他の動物が如何に強くとも如何に凶暴でも少しも躊躇することなしに跳び付くのです故に屢々自ら死を急ぐこともあるが又都合良く他獸を斃すこともある、象や水牛を襲ふときは虎自身が斃さるゝことが多い、

虎は通常木に登らず只非常に恐怖したるときのみ稀に木を攀ることがある、又屢水に入り、其泳ぐこと甚巧みである

蕃殖——虎は一回に兒を産むこと三頭位が通例である、虎の兒は活潑で戯れ好きで大層可愛らしいものであるそうだ、母虎は常に兒を大切に保護し次第に成長すれば跳び付くこと、噛み付くこと格闘することを戯の間に教へる、且つ虎兒成長して乳汁の外に別種の食物を得ることが必要となれば母虎は先づ弱き動物例へば鹿、猪、豚等を捕殺して其方法を其兒に示すものである、斯様にし教へ慣れたる虎兒は自ら餌食動物を捕へ得る力を生ずるまで母虎と離れることはない、即ち二年間も母虎に養育せられる、母虎が其兒を伴ふ間には殊に凶暴となつて地の動物を殺害するをが夥

しい而して新に母虎を離れたる幼虎は老虎に比して一層他の動物を害することが多い、幼虎は一時に三四頭の牛又は羊を殺すことがある、老虎は一時に牛又は羊一頭以上を殺すこと殆どないのである、斯様な虐殺を行はうとするときは幼虎は自分の常住せる岩窟を去り村落又は牧場に近しい所に潜伏し夜中に出で、牛又は羊を噛み殺し之を隔りたる密林の中に挽き行きて貪食するのである、人に與ふる害——虎は人類を害すること頗る多い嘗て印度に於て騎馬の人の一隊が森林の中を横りたるに一頭の虎突然藪の中から躍り出て騎手に跳び懸つて喰ひ付いた、人は虎と共に馬から落ちた、虎は直に其人の胸を咬へ齧着たる林の中に入りて其の形を失つた、其動作極めて迅速であつたから、同行の人も之を救ふ暇なかつたそうだ、又

嘗て印度駐在の英國士官よりの報告によると、或る夜番兵の居たるにも拘らず一頭の虎侵入し來りて天幕の中から兵士を咬へ去つたといふことである。斯様な實例が甚多いから、亞細亞の人をして大に虎につきての恐怖心を惹き起さしむるのである、現今でも虎の生存数は頗る多くあつて、毎年虎の爲に殺害せらるゝ人随分多い、一千八百八十九年東印度のみにて五百四十六人虎の爲に殺され家畜は六千八百八十二頭殺害せられたとのとである、**虎狩**、印度に於て虎は斯様に人類を害し家畜を殺害するものであるから政府では虎を捕殺したものに報酬を與へることになつて居る、虎を捕へる方法は種々ある、或は毒矢を弓につがへて虎が來り觸れ、ば自ら發する様に裝置して殺すことあり、又他の法は大きな土穴を掘つて其内に羊

の兒を入れ其羊の耳に小石を結び付け絶えず啼かしむるのである、虎は其啼聲を聞いて尋ね來り羊の兒を喰はんとて土穴の周圍を幾回となく廻り歩く其時傍の木に登りて豫て待ち構へたる獵夫は銃を以て之を撃ち殺すのである、

虎狩は印度の諸侯及び印度駐劄の英國士官等の非常に興味ありとする處である虎狩をなすには人々皆象に乗りて一列に整列し合圖に従つて漸次に藪の中に進入し草木を打ち敲きて虎を追ひ出し之を銃殺するのである、此時に當り銃丸若し虎の要部に當らず只僅に傷くるのみなる時は虎は極めて猛烈の性を現はし象の背部に跳び付きて騎手に噛み付かんとすることある、随分危険な遊獵である代りに亦云ふべからざる面白みがあるそうだ、**馴し得る性質**——虎の猛烈なる性質は前に記す

る如くであるが之を慣せば人に馴るゝ様になる往
 年佛國巴里の植物園に飼ひたる虎は印度から船で
 送られたものであるが大層人に馴れたゆゑ飼養者
 は虎の四脚の間に横はり或は其背を枕として臥す
 ることを得たといふことす、又嘗て印度より英
 國に持ち來されし牝虎は船中に於て少しも悪性を
 現はさなかつたがロンドンの動物園に檻飼せらる
 ゝに至つて甚發怒し易くなつた、然るに其後一
 水夫此動物園を觀に來た、此の水夫は此牝虎を英
 國へ送るとき船中に於て飼養したものである、水
 夫が牝虎の檻に近づいたところ、牝虎は此水夫を
 忘れなかつたと見ゆ、体を檻に摩り付け大に喜び
 の様子を現はした其後此水夫來る毎にいつも喜び
 の有様を現はしたとのことである、

如何に利用せらるゝか——虎の毛皮は極めて美

麗であるから敷皮として甚宜しひ從て其價も頗
 る高い、其肉は印度人の食用に供せられ、骨、齒、
 及び爪等まで悉く賣り拂ひ得るゆゑ、虎一頭を捕
 獲すれば一ヶ年間土人の一家を養ひ得るといふこ
 とである、

舌と膽とは共に其産地に於て藥品として用ひら
 る、土人は第一等の良藥として其膽を貴重するこ
 と恰も吾邦に於て熊の膽を珍重すると同じである
 膽とは肝臟の傍にある膽囊のことである、

要するに——虎は其外形猫に似たれど甚大きく
 性極めて猛烈であるが少しも不可思議の力を有し
 て居ない野獸である、今猶多く生存して人畜を害
 すること甚しいものゆゑ吾人は速にかゝる害獸の
 盡滅を望むものである、